1937 MIYAZAKI
2005 KUMAMOTO

連載　剣道具の製造工程、すべて見せます

続・日本がつくる剣道具

第二回　武道具の歴史と製作場所

構成／本誌編集部

戦後から海外移行へ

――まず、日本国内で現在どのくらい剣道防具の製作地が残っているのかを伺いたいのですが。

川辺　実はかなり限られているんです。そもそも歴史を振り返ると、戦後に武道具がつくれなくなった時期がありました。第二次世界大戦後、GHQ当局により武道は数年にわたり禁止され、防具製作も止まりました。禁止が解かれるまでの間に多くの工場はスポーツ用品、または生活用品の製造に転換していったと聞いています。

――武道の再開後、日本での製作はどうなっていったのでしょうか。

川辺　戦後、高度経済成長期に入ると、国内工場は次々に閉鎖され、当時労働コストが低かった韓国へ製造が移りました。釜山や大邱に大規模工場ができ、大量生産が始まります。この結果、防具が手に入りやすくなり、韓国の剣道人口増加にもつながったと考えられます。

――つまり、日本での製作は衰退していったのですね。

川辺　そうです。戦後の経済成長で貿易が拡大した流れの中で製造は韓国に移りました。昭和後期にほとんどの剣道防具が海外製になってしまったのです。

――現在も韓国が中心なのでしょうか。

川辺　韓国もやはり高度経済成長を迎えました。1960～1990年代半ばにかけてのことですが、1990年頃には、日本が韓国に防具製造を移行したのと同じように今度は韓国が中国・フィリピン・ベトナムに製造を移していったのです。そのころには日本国内はもとより、海外で剣道防具をつくる日本企業も姿を消し始め、技術が失われていく時代に入っていました。これが剣道防具製造の流れです。

補足として、戦後韓国へ移行する流れと同じく、ごくわずかですが直接台湾や中国に移行した日本企業もあったと聞いております。

海外での展開と今

――海外での製造についても教えてください。

川辺　1960年代に関東の職人が韓国ソウルに渡り、指導を始めたとされています。1970年代には釜山・大邱で大量生産工場が始まり、韓国三信物産などが代表的な存在となりました。大阪貿易や多田産業の下請けをしていた会社です。

同じく1960～1970年代にドウゲン産業やウイチ、シンジン、ヨンジン商事といった工場も次々に誕生しました。これは日本国内の賃金や物価が上がり、メーカーが製造を海外に委託し急展開した時期と重なります。1970年代が大きな分岐点でした。

――韓国から他国へさらに移行したのは。

川辺　1988年のソウル五輪の頃です。物価上昇で下請けも内職も続けられなくなり、韓国での製造は約20年で幕を閉じます。その後は中国、フィリピン、ベ

トナムへ移っていきました。

――では現在はどういう状況でしょうか。

川辺　日本資本の海外工場は、現在は全日本武道具1社のみです。国内は日本剣道具製作所が大半を担っていますが、それらを合わせても「日本人の手でつくられる剣道具」は世界市場の約1割にとどまります。

つまり現状、剣道界を支えているのは諸外国のオーナーが運常する海外の防具工場であり、市場の約9割が海外企業による製造と推測されます。

私は日本の防具工場を代表する立場として、海外拠点との交流を深め、市場の動向や安全性、規格、材料を確認しています。各工場の橋渡し役となることで、業界全体、ひいては剣道界全体を支えられるのではないかとも考えています。

国内唯一の生き残りと再生

――それでも、日本国内に製作の灯を残した企業があると伺いました。

日本最大級の古墳群で知られる宮埼県西都市にある日本剣道具製作所

川辺　はい。先程少し話に出た、宮崎県にある多田産業株式会社(現・日本剣道具製作所)です。1937年創業で、戦前から剣道防具の伝統工芸を守り続けていました。ただ、海外製品に押され、平成23年に民事再生法を申請し、実質的な倒産となりました。

――そこで川辺さんが再生に関わったのですね。

川辺　再生機構から立て直し依頼を受けましたが、借入総額が2億円を超えていたためすぐに返事はできませんでした。しかし幼いころから剣道の道を歩み、剣道具職人として生きてきた自分が、日本最後の技術を守らなければと思い決断しました。人生で最大の決断だったと思います。

――もしそのとき、決断していなかったら……。

川辺　おそらく日本製防具は消え、均衡が失われ世界全体の防具基準も制御できなくなり、性能や安全性も失われていたでしょう。そう考えると今でもゾッとします。苦しいこともありましたが、良い決断だったと思いますし、いまは職人たちと共に裏方として剣道界を支えていることを誇りに思っています。

現在の日本の製作地

――日本国内で製作を行なっているのは、現在どの地域なのでしょうか。

川辺　代表的なのは二つです。ひとつは宮崎県西都市の日本剣道具製作所で、日本製市場の8割以上を占めています。もうひとつは岩手県久慈市でもともとは柔道着専門でしたが、防具製作を始める際に宮崎から技術提供を受け立ち上げたと聞いています。ただし年々職人が減り、数人での製作となっているのが現状です。

――久慈では名人と呼ばれた方もいたそうですね。

川辺　はい。宮崎県出身の田原博文氏です。最近亡くなられました。交流もあり親しくさせていただいていたので、とても寂しいですね。また、落合正人さんや、林下幸民さんも頑張られており、素晴らしい職人です。

――他にも国内の職人はいらっしゃるのでしょうか。

川辺　地方に少数ですが個人で続けている方もおられます。本当に貴重な存在です。剣道具職人は国の宝ですから、もし見かけたらぜひ励ましの言葉をかけてあげてほしいと思います。

日本剣道具製作所で作る防具は伝統的工芸品に指定されている。
伝統工芸士　新名博文氏

案内人

川辺尚彦（かわべたかひこ）

(株)日本剣道具製作所代表取締役
(株)全日本武道具代表取締役

昭和55年熊本県多良木町に生まれる。
多良木高校卒業後、大学を中退して武道具業界に飛び込む。
25歳で独立し全日本武道具を創業、
平成26年日本剣道具製作所の経営も手がける。
平成29年自社海外工場を設立。
令和元年、内閣総理大臣安倍晋三より首相公邸へ招待を受ける。
市場80%以上の日本製剣道防具を製造。